



TITLE:

京大広報 No. 270

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 270. 京大広報 1984, 270: 481-492

ISSUE DATE:

1984-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209416>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

# 京大広報

No. 270

京都大学広報委員会



太陽黒点のまわりの活動領域 —関連記事本文488ページ—

## 目次

卒業式における総長のことば

総長 沢田敏男…… 482

附属図書館新館開館記念式…… 486

昭和59年度入学選抜学力試験の結果…… 486

昭和58年度修士学位授与式…… 487

昭和58年度卒業式…… 487

部局長の交替等…… 487

昭和59年度医療技術短期大学部入学試験の結果…… 488

昭和58年度医療技術短期大学部の

卒業式・修了式…… 488

〈紹介〉

理学部・飛騨天文台…… 488

〈保健コーナー〉

耳鳴り…… 490

〈資料〉

「国家公務員定員管理」についての

国立大学協会の要望書…… 491

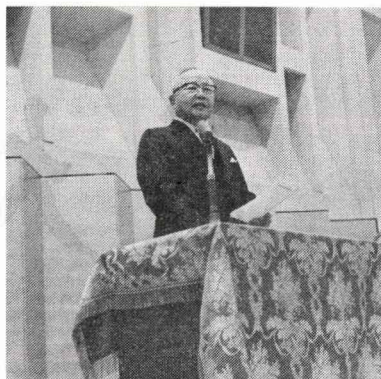
計報…… 491

〈随想〉

出雲だより 名誉教授 田村喜弘…… 492

## 卒業式における総長のことば

総 長 沢 田 敏 男



卒業生の諸君、おめでとうございます。

本日ここに、昭和58年度卒業式を挙行し、文学士199名、教育学士44名、法学士376名、経済学士229名、理学士283名、医学士116名、薬学士79名、工学士844名及び農学士262名、合計2,432名の諸君に合格証書を授与できますことは、本学の最も大きな喜びとするところであります。

諸君の卒業を祝い、その前途を祝福するためにご臨席いただきました本学名誉教授の先生方、各部署局長並びに教職員の皆様に対しまして、卒業生の諸君と共に、心から感謝し厚くお礼申し上げます。

新しく学士となられた卒業生の諸君、諸君一人一人に、それぞれのご苦心、ご苦労があったことと推察し、本日の卒業を心からお慶び申し上げると共に、今日、小学校から数えて16年あるいは18年の長きにわたり、諸君の学業を支えて下さったご両親はじめ、関係者各位に対しまして、卒業生の諸君と共に、そのご厚志、ご高恩に対して、心からの敬意と感謝を捧げたいと存じます。

諸君が希望に燃えて京都大学に入学されてから4年、あるいは6年間、蛍雪の功になって、今日ここに新しく学士号を得られたのでありますが、この間さまざまな方法で自己形成がなされたことと思います。自ら学ぶことの楽しさを覚え、そしていわゆる京都学派の学風を肌で感じ得た諸君もあるでしょう。また、学問とスポーツとが両立するよう工夫し、心身の練成に日夜努力を重ねた諸君もあるでしょう。更にまた、いろいろの課外活動を通じて広く豊かな教養を修得すると共に、終生の友ともいうべき、良き多くの友人をもち得て、今日を迎えた人もあると思います。諸君は在学期間中を顧みて、それぞれの感慨に浸っていることでありましようが、諸君はいずれもめでたく新しく学士になられたのであって、京都大学の卒業生であるという自信と誇りをもって、実社会にむかって力強い第一歩を踏み出してほしいと思います。

現代は国際的な相互依存関係が深まり、ますますその緊密化が要請される時代であります。このような国際化や国際交流が進展する社会へ巣立ち、活躍されようとする諸君に対し、とりわけ重要な学問の国際交流や異質文化への対応について、一言所感を述べたいと思います。

学問は本来、真理の探究を志向する人類の共同作業であることから、研究者間での交流は自明のことといえます。しかも学問が日進月歩の速さで進歩を遂げつつある現状では、学術情報の相互交換を行うことにより、広く知識を世界に求め、それを積み重ね、より新しい知識を生み出していく努力をいたさねばなりません。政治的・経済的な壁が自由な交流を妨げている事実はあるとしても、理念としての交流に国境の壁があってはならないことは万人の認めるところでありましよう。しかし、このように学問の国際交流と一般的にいわれる場合に考えられる交流というのは、ある一定の真理の絶対性という信念に基づいて行われているように思われます。すなわち、それまで培われてきた学問体系に整合するものだけが交流の対象として選択され、一つの尺度に基づいて直線的に知識を累積していくことを目的とする交流であります。これは、これまでの学問の交流における一般



的な定式であるといえましょう。

この交流の定式に対して、私は、次のように考えるのであります。学問には国境がない、真理は一つである、ということが本当であるかどうか、ということをここで正面から取り上げるつもりはありません。しかし、真理の絶対性、あるいはそれに反対する相対性を云々する以外に我々は真理の豊かさ、深さ、創造性を<sup>いよほ</sup>彌増す方向に目を向けて努力することも大切なことではないかと考えます。すなわち進歩とは一体何なのか、人類はどの方向に進んでいるのか、といった根本的な疑問、根源的な反省を含めて、真理を深め、豊かにする学問の交流があるべきだと強調したいのであります。

我々は今日まで西洋の学問体系を大きく継承し、発展させてまいりましたが、その西洋の学問体系でさえも、一つの国、一つの文化のなかで完成されたものではなく、まさしく交流によって築き上げられてきたことは、明らかに歴史の示すところであります。しかしながら、その交流は世界全体の叡智を漏れなく集めたというのではなく、部分的、地域的、時代的に限定された枠組みのなかで発展してきたものであるという——部分的認識によるものといえる——そういう認識も重要なことであります。いわば西洋の学問体系も一つの部分的認識であって、全体的認識に基づく学問体系ではないという見方もできると思います。

そこで当然我々は、西洋社会のなかから生まれてきた学問の成果、あるいは、西洋文化の土壌で培われた学問体系を、盲目的に受け入れるのではなく、他にも妥当な見方、考え方、分類のし方があり得るという可能性の期待を持つこと、そのことが全人類的に見た真理を豊かにし、かつ深めていく交流だということです。この可能性の発見は、我こそ真なりという、かたくなな態度からは、決して生まれません。常に謙虚に事実を認識して、そこから学ぶ姿勢がなければなりません。実りある、創造的で、また、生産的な国際交流というのは、そのような姿勢から生まれてくるものと確信します。

発展途上国との学術国際交流も、西洋の学問体系の殻のなかで、学問的に後進の仲間を指導するのだという<sup>かた</sup>ような交流の態度だけであっては、交流する双方にとって実りの少ないものとなり、お互いに不満を<sup>かた</sup>託つことにもなりかねないと思います。それぞれのよって立つ学問の枠組みについての反省的な自覚に基づく、新しい可能性を追究しあう、創造的な交流でなければならないと考えるものであります。

以上述べたことは、学問の国際交流についてであります。要は、私は真理を探究するのが学問の道であるとしても、その道には、さまざまあり得るという理解認識なしには、真の学問の国際交流はあり得ないだろう、と考えるものであります。

次に国際交流において大切な、異質文化への対応について申し述べてみます。

現代は「文化の時代」ともいわれるほど、文化ということばが日常多く使われるようになりました。学問分野においても文化心理学、文化社会学、文化人類学あるいは比較文化学などという十指に余る文化を冠した学問領域が創始され注目されてきております。文化は人間の在り方に関わり、意味の体系を指すものだといわれますが、私は、ここで二つの区別をしてみたいと思います。一つは人類文化と個別文化、もう一つは横糸としての文化と縦糸としての文化という二つであります。

諸君は、一人一人その個性をもち、その人、独自の習性、習慣を身につけながら、しかも日本人として日本文化を共有しているといえます。それと同じように地球的規模で見れば、日本文化はそれ自体として独自で固有なものをもちながら、人類としてまた、人間として、人類文化というものを共有しているのであります。日本文化という個別文化は、言い換えれば人類文化のなかの一つの

営為にすぎないともいえましょう。この個別文化は決してそれ自体のみで発展しているのではなく、他の文化と常に交流しながら、他文化を創造的、生産的に見ることによって、自己批判あるいは自己創造を繰返して、独自の個別文化を豊かにし、発展させていくという主体的な営みを行っているのであります。また人類文化という「地」があるからこそ、そこに個別文化という「図」が描けるという認識も大変重要であり、それ故に文化の交流ということが、可能となり、大切なことであると申せましょう。

もう一つの区別である横糸と縦糸の文化という比喻は、この固有文化を一つの織り物として見たときのたとえであります。伝統として受け継がれてきた縦糸を、交流によってもたらされた横糸として、独自の文<sup>あや</sup>を織りなすことによって個別文化が成立し発展していくものと考えます。

さて、異質文化というものは、縦糸の質が我々の文化の糸とは特殊に違っているものといえましょう。ともすれば、我々は横糸のほうに気をとられがちであります。その多くは交流によりもたらされたもので、我々の認識の枠組みに、より近いからであろうと思います。しかし諸君、留意すべきことは、織り物の文<sup>あや</sup>は勿論、横糸だけを見たのではわかりません。縦糸としての文化を理解しなければ本当の文<sup>あや</sup>が見えてこないということでもあります。

文化としての学問は、この横糸としての文化乃至は人類文化に近いものでありますが、それそのものであると断言できる段階にはないと思います。例えば、ダムという構造物は水をせき止めて貯溜し、その水を人間の生活や生産活動に利用するために造られるものでありますが、そのダムや水が、生活の一部となっている文化から見れば、人類に普遍的なものと受け取られるかもしれません。しかし、ダムを造ったところ、造らないところ、造られないところ、また、造らなければ生産活動の行えない地域等の各土地柄によって、明らかに生態学的条件が異なり、ダムに対する考え方も違ってまいります。そしてダムの定義、目的、形式というものは、まさに、これらの文化ごとにさまざまな様相を呈してくるでしょう。

古代アンデス地帯の大土木工事であるアスコペ (Ascope) の開水路や水路橋、中国の秦の始皇帝時代に築造された霊渠 (興安運河)、アンコールのバライ (Baray) と呼ばれる貯水場、あるいは、インド・デカン高原の溜池というものは、単に今日のダム工学や水利施設工学という学問だけから完全に解明されるものではありません。さまざまな個別文化を秘めているものです。アンコールのバライに至っては、その用途さえも確かなことはわからないくらいであります。

これらの真の理解にはまず、内在する固有の原理すなわち、上述の縦糸の発見という努力を常に第一義的にする必要があると思います。そこには、それらの文化を創り上げた人々の営みの歴史が刻み込まれているのであって、我々が単純に当たりまえだと思ふ規準や尺度だけから観察すると大きな見当違いを犯すことになるものです。

異質文化を、それ自体として 内在的に理解した上で 対象化することが大切なことと思います。対象化というのは相対的に見ることで、異質文化も自己の文化をも絶対視しないということでもあります。我々にとっての真理を、ときには相対化して、そして相手が正しいと信じていることを理解する心構えが大切で、そのことが異質文化への視座として基本的な態度であるといえましょう。我々が培ってきた固有の文化を大切にしなければならないのは勿論であります。そして大切にすればするほど他の文化も、それなりに尊重しなければなりません。すなわち、固有文化の尊厳性を認め合うという文化相対主義の感覚が肝要であると申せましょう。

以上、要するに、人類文化と個別文化、そして文化の横糸と縦糸とを共に視野のなかにおさめて、より豊かな文化を創造することが、我々現代人の 双肩にかかっていると考えるものであります。そして私が諸君に望むことは、異質文化への対応、理解に当たってともすれば、人類文化や横



糸としての文化を表面的に観察して、それでよしとし易いのであります。それだけでは異質文化への知的関わりではなく、個別文化をもっとよく理解するための縦糸を見つけ出す努力をしてほしいということでもあります。

これまで述べてきたことから、学問の国際交流にしても、異質文化への対応にしても、その根底には、わが日本を相対化することの必要性が理解されることでしょう。これは世界という空間的、時間的広がりの中に日本を位置づけることにほかなりません。勿論、アメリカやヨーロッパだけが世界ではなく、アフリカも東南アジアやアジア大陸も、またすべての大陸や大洋が世界のなかにあるということを忘れてはなりません。今日、世界のなかの日本というと、GNPはどうか、人口は、あるいは科学者の数は、などといった類いのことを思い浮かべるかもしれませんが、それらの事柄は、西洋を規準として追いつけ、追いこせ式の相対比であって、本当に日本という国、国柄を人類文化のなかで位置づけたことにはならないと思います。どのような個別文化からも学びとり、いわゆる新しい可能性をさぐる創造的な交流をするところから、日本の真の姿が浮かび上がってくるものと思います。

文化のなかの普遍的なものは、自然と他の文化と融合し、これに反して特殊なものは孤立し易いというのが一般的な定式でありましょう。そして融合は個性をなくしてしまうし、孤立は世界と交わらない偏狭なものとなってしまう傾向をもつものです。そのような傾向に流されることなく世界のなかに通ずる日本を見定めるには、融合と孤立、普遍と特殊との弁証法的な不断の知的緊張関係から創出された学問を实践すること、このことが必要であると考えます。

広く社会の一員として、また人間としての協調性や簇を身につけることと、同時に個性を伸ばすこととを両立させる意味を諸君は十分承知していると思います。私の申し上げるところは、まさにこの常識の延長線上にあって、しかもそれを知的に実行してほしいということでもあります。学問をした個人として、また社会のなかで生活する人間として、全体のなかでの部分としての特殊性を十分認識し、自覚してそれを伸ばしながら、しかもその全体のなかで自己を相対化し、普遍化していくという一見ごく当たりまえのことが、学問の国際交流や異質文化の理解、あるいは世界のなかの日本を支える哲学であるということです。諸君、このことを知的営みのなかで、十分体得してほしいと希望するものであります。

京都大学は、真に開かれた大学としての大学形成をめざし、学問の国際交流により一層積極的に取り組んでまいりたいと考えております。新しく学士となられた卒業生の諸君、明日からの国際社会におけるご活躍をお祈りして止みません。

終りになりましたが、本日卒業される諸君のなかに、本年度アメリカンフットボール全国征覇の偉業を達成したチャンピオンの方、数名がおられることを大変嬉しく思います。卒業生の諸君、カレッジスポーツにおける、この快挙を心の糧として、諸君の秘めもつ、無限の可能性を追究してほしいと願うものであります。

どうか諸君、健康にくれぐれも留意されると共に、母校京都大学をいつまでも心のなかに抱いて歩んで下さい。京都大学もまた、諸君一人一人の歩みを、永くいつまでも見守り続けることでありましょう。

諸君の栄えある門出に当たり、心より祝意を表すると共に、一言所感を申し述べて饞けの言葉といたします。

(本稿は、3月24日の卒業式における総長のことばを速記をもとにしてまとめたものである。)

## ＜大学の動き＞

## 附属図書館新館開館記念式

3月21日（水）附属図書館新館開館記念式が本学附属図書館で挙行された。

開館記念式は、午後1時にはじまり、高村仁一附属図書館長の式辞に続いて、沢田敏男総長の挨拶、廣田史郎文部省学術国際局情報図書館課長、真田武夫東京大学附属図書館長の祝辞があり、午後2時に終了した。引き続き披露パーティが催され、このあと館内全室が列席者に披露された。

なお、4月9日（月）から、全面開館される。

（附属図書館の新営特集として、本広報号外（4月1日）を発行する。）



（附属図書館）

## 昭和59年度入学者選抜学力 試験の結果

昭和59年度入学者選抜学力試験の合格者氏名が、3月19日（月）に学部ごとに発表された。

学部別の受験者数及び合格者数等は次表のとおりである。

学 部	募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	倍 率	欠席率	合格者数	合格者得点		備 考 (満点)
								最 高	最 低	
文 学 部	200人	730人	—人	711人	3.6	2.6%	200(49)人	912.66	774.83	1,100
教育学部	50	134	—	132	2.6	1.5	51(20)	850.5	748.5	1,050
法 学 部	350	738	737	726	2.1	1.5	350(30)	973	857.5	1,150
経済学部	210	820	—	799	3.8	2.6	210(15)	972.75	861.66	1,200
理 学 部	281	972	970	953	3.4	1.8	281(19)	919	756	1,050
医 学 部	120	377	—	360	3.0	4.5	120(10)	1,161.5	997	1,250
薬 学 部	80	155	—	155	1.9	0	80(33)	1,054.5	874.5	1,250
工 学 部	945	1,965	—	1,949	2.1	0.8	945(16)	1,097.5	813.15	1,250
農 学 部	300	770	—	765	2.6	0.6	300(43)	1,056.5	850.5	1,250
計	2,536	6,661		6,550	2.6	1.6	2,537(235)			

- （注） 1. 受験者数・欠席率は最終日（文・教育・法・経済学部は外国語、理・医・薬・工・農学部は理科）のものである。
2. 合格者数の（ ）内は女子で内数である。
3. 法学部と経済学部の合格者数には、14名と5名の外国学校出身者のための選考試験合格者が含まれている。
4. 第1段階選抜合格者数の一は、第1段階選抜を行わない学部を示す。



## 昭和58年度修士学位授与式

3月23日（金）午前10時から、昭和58年度修士学位授与式が、本学総合体育館で挙行された。

学位授与式は、名誉教授など来賓の臨席のもとに学位記授与が行われ、「総長のことば」があっ

て午前10時35分に終了した。

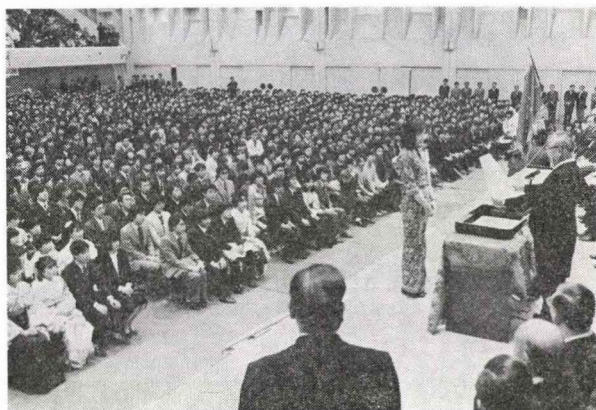
修士課程修了者は、文学研究科69名、教育学研究科18名、法学研究科16名、経済学研究科13名、理学研究科144名、薬学研究科27名、工学研究科546名、農学研究科111名の計944名である。

## 昭和58年度卒業式

3月24日（土）午前10時5分から、昭和58年度卒業式が、本学総合体育館において挙行された。

卒業式は、名誉教授など来賓の臨席のもとに行われ、学歌斉唱、合格証書授与、「総長のことば」のあと、「蛍の光」を斉唱して、午前10時55分に終了した。

新学士は、文学部199名、教育学部44名、法学部376名、経済学部229名、理学部283名、医学部116名、薬学部79名、工学部844名、農学部262名の計2,432名である。



## 部局長の交替等

### 教育学部長

小林哲也教育学部教授（比較教育学講座担当）が4月1日教育学部長に再任された。任期は昭和60年3月31日までである。

### 経済学部長

平田清明経済学部長の辞任に伴い、その後任として山田浩之経済学部教授（交通論講座担当）が4月1日任命された。任期は昭和60年1月9日までである。

### 教養部長

西村 孟教養部長の任期満了に伴い、その後任として浮田典良教養部教授（人文地理学担当）が4月1日任命された。任期は昭和60年3月31日までである。

### 化学研究所長

藤田榮一化学研究所長の任期満了に伴い、その後任として稲垣 博化学研究所教授（高分子分離学研究部門担当）が4月1日任命された。任期は昭和61年3月31日までである。

### 人文科学研究所長

上山春平人文科学研究所長の任期満了に伴い、その後任として吉田光邦人文科学研究所教授（日本思想研究部門担当）が4月1日任命された。任期は昭和60年3月31日までである。

### 基礎物理学研究所長

牧 二郎基礎物理学研究所教授（中間子論研究部門担当）が4月1日基礎物理学研究所長に再任された。任期は昭和61年3月31日までである。



**大型計算機センター長**

丹羽義次工学部教授（構造力学講座担当）が4月1日大型計算機センター長に再任された。任期は昭和61年3月31日までである。

**放射線生物研究センター長**

鳥塚莞爾医学部教授（核医学講座担当）が4月1日放射線生物研究センター長に再任された。任期は昭和61年3月31日までである。

**情報処理教育センター長**

大野 豊工学部教授（情報システム工学講座担当）が4月1日情報処理教育センター長に再任さ

れた。任期は昭和61年3月31日までである。

**医用高分子研究センター長**

山室隆夫医用高分子研究センター長の任期満了に伴い、その後任として中島章夫工学部教授（高分子分子論講座担当）が4月1日任命された。任期は昭和60年3月31日までである。

**学生部長**

神野 博学生部長の辞任に伴い、その後任として加藤幹太理学部教授（放射線生物学講座担当）が4月1日任命された。任期は昭和60年3月31日までである。

## 昭和59年度医療技術短期大学部 入学試験の結果

昭和59年度医療技術短期大学部入学試験の合格者氏名が、3月16日（金）に発表された。

受験者数及び合格者数等は次表のとおりである。

学 科	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
看護学科	80人	174人	149人	89人
衛生技術学科	40	200	170	43
理学療法学科	20	125	101	21
作業療法学科	20	90	80	23
計	160	589	500	176

## 昭和58年度医療技術短期大学部 の卒業式・修了式

医療技術短期大学部では、3月19日（月）午前10時から、本短期大学部講堂において来賓など臨席のもとに、卒業式及び修了式を挙行了。式は卒業証書及び修了証書授与、学長式辞、来賓祝辞と進行し、午前10時40分終了した。

この新しい門出を迎えた者は、看護学科74名、衛生技術学科39名及び専攻科助産学特別専攻20名の計133名である。

（医療技術短期大学部）

## < 紹 介 >

### 理学部・飛騨天文台

理学部附属飛騨天文台（岐阜県吉城郡上宝村）のドームレス太陽望遠鏡の設置目的や性能については、その竣工式の模様とともに、本広報 No. 180（1979. 6. 15）に掲載されているが、研究者が望遠鏡を本格的に使用しはじめたのは、1980年になってからである。それ以後現在までの約4年間に、

望遠鏡がどのように使用され、またどのような仕事をしてきたかを、簡単に報告する。

まずこの太陽望遠鏡が、日本に現存する他の太陽望遠鏡と比較して格段にすぐれた性能をもつことは、いまや周知の事実である。世界的にみても、アメリカやヨーロッパの主要な天文台から公表される太陽像と比較して、この望遠鏡で撮影した太陽像は全く遜色がないばかりか、むしろすぐれていると考えられている。その一例として太陽

面から噴出するサージ型紅炎の写真を見ていただきたい。この紅炎は大抵の写真では太い棒状にしかうつらないが、この写真からは、非常に細い糸状のジェット集合であることがわかる。そして太い棒状であるか、細い糸状であるかは、サージ紅炎の噴出機構を考える上で非常に重要なことなのである。

この太陽望遠鏡は毎日の太陽面監視用のためのものではなく、太陽物理学の最先端をゆく純研究用のものである。したがって本学の研究者だけでなく、東京天文台をはじめどの大学の研究者に対しても、希望されればこの望遠鏡の使用の便宜をはかっている。ただしこの望遠鏡を使用する能力のある研究者に限定されることはいうまでもない。このような次第で、年間を通じて太陽がでている限り、日曜はもとより正月でもこの望遠鏡の筒先は常に太陽に向けられている。



サージ型紅炎

太陽面現象は実に変化に富んでいる。通常、きわめてせまい透過幅の特殊なフィルターを通して太陽面を観測する。そうすると太陽の白色光では見えない、太陽面上に浮かぶ紅炎や、太陽面の爆発現象を見ることができる。写真はこのフィルターを通して見た太陽黒点のまわりの活動領域の姿である。黒い細長い模様は磁場に沿った冷たいガスの流れであり、白い模様はガスの加熱されている場所と考えることができる。表紙写真の視野は、その対角線の長さが太陽直径の $\frac{1}{6}$ 位の太陽面のごく一部分に過ぎない。この写真の分解能は極めて高く、撮影時刻がわずか30秒異なっただけのこのような2枚の写真を比較して見ても、その細部構造の変化が認められる。このような太陽表面の大規模でかつ急速な運動は、われわれの写真で初めてとらえられたものである。

太陽面現象の一つに、フレアというのがある。これは10秒から1分間位で、太陽面のかなり広い場所が突然に燃えだして白く輝き、数時間たてばもとの状態にもどる現象である。この現象は最大級のものでは $10^{33}$ エルグという莫大なエネルギーを放出し、地球上層大気にも影響を与えるので、天文学者や地球物理学者から、その機構解明に強い関心がよせられている。飛騨天文台では、フレアのように急速に変化する現象の映画を作ること事を事業の一つとしている。フレアは実に複雑多岐な現象である。観測が終った後、10～20倍に加速してこの映画をみると、フレアという現象の動的な側面の理解に非常に役立つ。

飛騨天文台での映画製作はフレアに限らず、もっと広い意味での太陽活動現象一般に及んでいる。もし学内に太陽活動現象に興味のある方がおられれば、16mmフィルムをお貸しすること



ができるので、天文台まで連絡していただきたい。飛騨天文台でも、長時間にわたり安定した地球大気層に恵まれないと良い映画はできないから、自信をもってお貸しできるフィルムは、そう

多数はないのが実情である。それでもこの種の映画は日本で初めて製作されたものであることを付け加えておきたい。

(理学部)

#### 保健コーナー

### 耳 鳴 り

精密な聴力検査が行われる防音室に入ると、音刺激がないのにほとんどの人が耳鳴りを感じますが、これは病的なものではありません。病的な耳鳴りとは、日常生活において聞こえるはずのない音、聞こえて欲しくない音が聞こえる状態をいいます。

音波すなわち空気の振動が鼓膜に伝わり、これによって鼓膜の後方にある耳小骨（ツチ骨、キヌタ骨、アブミ骨の3つから成っている）が振動し、更にその奥にある蝸牛とよばれる場所で振動が電氣的刺激に変えられて聴神経を伝わり、大脳に到達してはじめて音として認識されます。



耳鳴りには大きく分けて自覚的耳鳴りと他覚的耳鳴りがあります。後者は身体内部、特に聴器の近くのどこかに音を発するものがあり、その機械的刺激によるものです。自覚的耳鳴りに比べてその数は少ないのですが、必ずしも稀ではありません。例えば聴器近くに生じた血管性雑音や筋肉のけいれん、下顎関節の異常によって起こることがあり、また、これらの異常に頭部の外傷が関与している場合もあります。前者は一般にいわゆる狭義の耳鳴りで、一種の聴覚異常感です。音刺激を伝える器官、即ち聴覚伝導路に何らかの異常が生じ、神経に誤った刺激が伝えられ、音刺激なしに生じるものです。



耳鳴りを訴えて受診する人は一般に中年に多く、小児や老人は比較的少ない傾向があります。耳鳴りの原因となる疾患は多種多様ですが、代表

的なものを挙げると次のようになります。

1. 鼓膜より外側の異常：耳垢、異物
2. 中耳（耳小骨のある部位）の病変：中耳炎、耳管狭窄
3. 内耳（蝸牛のある部位）の病変：臨床的には一番多いもので、耳硬化症、内耳炎、メニエール病、薬物中毒（特にストマイやカナマイに因る）、老人性難聴、騒音性難聴など
4. 中枢性疾患：脳腫瘍、髄膜炎
5. 全身性疾患：高血圧、低血圧、貧血、糖尿病、リウマチ

耳鳴りの性質によってある程度原因が推測されるといわれています。キーンというような高音で持続性なら内耳以後の病変であり、ゴォーとかブーンとかの低音で断続性なら、中耳までに原因があることが多いようです。また、メニエール病の多くは一側性の耳鳴りであり、ストマイやカナマイに因る耳鳴りは両側性であることが多いようです。

耳鳴りの原因としていくつかの病気を挙げましたが、訴えられる耳鳴りの性状と、聴力検査をはじめとする多くの検査や臨床所見を総合して、疾患部位や原因を推測することになります。しかし、確実な診断ができる場合は必ずしも多くはなく、また、完全によくなくなるか否かの予後判断もむづかしい場合が少なくないのです。



原因が明らかなもの、例えば耳垢、外耳道異物、急性中耳炎、耳管狭窄などは、その治療によって改善が十分に期待されます。これに反して原因が内耳から中枢にある場合には、確実な予後判断は大へんむづかしく、一般には神経の代謝を改善する目的でビタミン剤、神経賦活剤、血流改善剤、精神安定剤などの投与といった対症療法になります。

近年になって、麻酔剤を中耳に注入したり、静脈に注入する方法、頸部の後方にある大後頭神経を麻酔する方法、中耳に副腎皮質ホルモンを注入する方法など、いろいろな方法が試みられ効果を認めたという報告もあります。また、耳鳴りの無

い側の耳に耳鳴り類似音を聞かせることによって、耳鳴りが軽快したとの報告がなされていますが、残念ながら決定的な治療法はないのが現状です。

(保健診療所 岩永迪孝)

## <資 料>

### 「国家公務員定員管理」についての 国立大学協会の要望書

このたび国立大学協会会長から、「国家公務員定員管理」について、以下のとおり文部大臣宛要望書を提出した旨報告があった。

昭和59年3月19日

国立大学協会会長

平 野 龍 一

#### 要望書の提出について

政府は過般「臨時行政調査会の最終答申後における行政改革の具体的方策について」の閣議決定(58.5.24)を行い、この中で、国家公務員の定員管理に関し「技能・労務職員等の採用抑制措置」を挙げておりますが、これが全面的に実施されれば国立大学における教育・研究業務の遂行に重大な支障をきたす虞れがあります。

このため、第6常置委員会でこれの対応について検討を行い、その結果、早急に関係方面に善処方を求める要望を行うべきとの結論となりましたので、同委員会作成の要望書(案)を持ち回り理事会に諮つたうえ、去る3月13日、文部大臣宛これを提出いたしました。

以上、技能・労務職員等の採用抑制措置に関し緊急に処置いたしましたので、同要望書の写を添えここに報告いたします。

昭和59年3月8日

文部大臣

森 喜 朗 殿

国立大学協会会長

平 野 龍 一

#### 「国家公務員定員管理」についての要望書

政府は臨時行政調査会の最終答申後における行政改革の具体化方策(昭和58年5月24日閣議決定)の中で「技能・労務職員等が携わっている事務・事業については、民間委託等の合理化措置を積極的に講ずることとし、これら職員の採用は公務遂行上真に必要な場合を除き、昭和59年度以降行わないものとする」ことを決定したが、国立大学においては、6次にわたる定員削減への対応等のため、既に可能な限りの民間委託等の合理化を進めているところであり、この決定がわが国の行政改革と財政再建のもとにおける止むを得ざる措置であるとは言え、これによつて大学教官の教育・研究に過重な負担を与え、ひいては大学の使命である学術研究の発展と高等教育の充実に停滞を生ずる恐れがあることを懸念する。

そもそも、国立大学における技能・労務職員の多くは、大学の教育・研究を円滑に遂行するための職員であり、教育・研究に密接に関係した複雑かつ多様な業務に従事している。従つて、他省庁と異なりこれらの職種には長期の訓練と経験を必要とし、民間委託にはなじまないものが多い。

このような理由から、国立大学における教育・研究業務の遂行と切り離すことのできない職務に携わる技能・労務職員に関しては、「公務遂行上真に必要な場合」として取扱われるよう強く要望する。

## 計 報

原 隨園(本学名誉教授・文学博士)

3月25日逝去、90歳。東京帝国大学文科大学卒。昭和8年本学文学部教授就任、32年退官。その間評議員(16

年～18年)、附属図書館長(22年～24年)、文学部長(23年～25年及び27年～29年)を歴任。同44年勲二等旭日重光章受章。専門はギリシャ史。



